

種名	<u>イ シ ガ イ</u> <u>Unio douglasiae douglasiae</u> 
分類	イシガイ目イシガイ科
俗称	カタツケ・ニギラッコ(群馬)、ハスラツカイ(愛知)
形態的な特徴	殻長 60mm、殻高 28mm。殻は厚く、長卵形。殻の後方はややとがる。殻の頂上部にやや細かいさざ波状の彫刻があるが、しばしば消失していてなめらかなものがある。内面は白っぽい真珠光沢がある。
分布	北海道から九州までの日本各地に分布する。
繁殖行動	産卵は雌雄異体で3～8月頃にかけて行われ、出水管からグロキディウム幼生を放出する。グロキディウム幼生は左右の殻をチョウの翅のように動かして泳ぎ、タナゴ類、タモロコ、ワカサギなどの淡水魚類に寄生する。この幼生は成長すると魚から落ち、砂の中で生活をする。砂中に群れをなして生息し底質上をよく動き回る。
生息場所	おもに澄んだ流れの砂礫底から小砂礫底にすむが、ある程度富栄養化した水域でも生息できる。
食性	エサはプランクトンや有機物で入水管から吸い込んで食べる。
生息環境への配慮事項	水域自体の減少、水質、底質の汚濁などにより減少している。イシガイ科には共通していることだが、本種の保護には現在の生息水域の保全のほか、グロキディウム幼生期に寄生する淡水魚類の保護も欠かすことはできない。また、本種はタナゴ類を保全する上でも重要な種である。本種が生息するためには水質、底質の汚濁が少なく、水生植物の繁茂した砂底～小砂礫底の河川や池沼が必要であり、これが永続的に維持されることが望ましい。
その他	琵琶湖水系のものは歯の形状などから別亜種の「タテボンガイ Unio douglasiae biwae」とされる。
引用文献： http://www.maff.go.jp/nouson/mizu_midori/menu/main.html を改変	